

# 大学院留学生はどのように文章を書き上げているか：効率的書き手と非効率的書き手の文章産出過程の特徴

衣川隆生

名古屋大学大学院

この論文では、効率的書き手と非効率的書き手の文章産出過程の特徴を把握するため、両者がどのようにしてプランを生成しているか、どのようにして言語表現を考え出しているかが分析される。分析の結果、効率的な書き手は知識としてすでに文章の全体的なプランを持っている可能性があること、表現を考えるときにも、プランを生成するときにも、常に前後の文脈にあっているかどうかを確認していることが示唆された。また、非効率的な書き手はプランを生成するときに主に「何を書くか」しか考えておらず「どのように書くか」を検討していないことが示唆された。さらに、これらの結果から、効率的書き手と非効率的書き手の差は、プランニングや読み返しという行動の種類や量だけで把握できるものではなく、行動の目的やプランの内容といった質的な分析を行うことによって初めて理解できるものであることが示唆される。

## How Overseas Graduate Students Compose in Japanese: A Study of Two Writers

Takao Kinugawa

*Graduate School of Literature, Nagoya University*

Zamel (1983) claims the difference in effective and ineffective writers lies in the nature of planning, whereas Raimes (1985) indicates that ineffective writers do not have many planning behaviours and do not pay much attention to mistakes. A cause for these findings might be attributed to the quantitative nature of their research. As Krapels (1990) suggests, processes of text generation differ from writer to writer, and even within one writer, according to the nature and context of the task. The purpose of this study is to describe in detail the composing processes of effective and ineffective second language writers of Japanese in order to arrive at a deeper understanding of what is actually happening in JSL writer's mind while they compose. Two graduate students studying at a Japanese university, one considered to be an effective

*JALT Journal, Vol. 17, No. 2, November, 1995*

writer and the other to be an ineffective writer by a group of JSL teachers, were examined for the following; 1) How did the writers generate plans and which strategies did they use during planning; and 2) How did they actually compose and which strategies did they use in composing. Following think-aloud protocols, the students were asked to think aloud while planning and writing. This process was video recorded for examination. The behaviours of both writers were classified into three categories: 1) planning processes; 2) writing processes, and 3) editing processes. These three categories of behaviours were then examined in the light of 1) how each writer generated a plan before they started writing, 2) how each writer wrote the first paragraph, and 3) how each writer continued to generate a plan while writing. The results showed the following characteristics: 1) the ineffective writer only thought about "what to write" and did not consider "how to write" in generating a plan; 2) the ineffective writer's main concern while writing was to write down the expressions that came to her mind and editing behaviours were hardly observed; 3) it is suspected that the effective writer had a global plan concerning the overall structure of the text, i.e., how to start and finish the text before beginning to write; 4) the effective writer took the context into consideration when generating plans and determining appropriate expressions, and 5) writing and editing behaviours were alternately used in the effective writer. Finally, the author suggests that future research into JSL writing should: 1) examine the quality of writer's plans as well as the quantity of planning behaviours; 2) consider the purpose of rereading as well as the quantity of rereading behaviours, and 3) clarify what kind of knowledge writers have concerning the plans of the text.

1980年代から、第二言語学習者の文章研究は、「書いたもの」だけでなく、「書く行為そのもの」、つまり文章産出過程にも焦点を当てるようになってきた。このような研究が行われるようになった背景には、文章がうまく書ける書き手（以下、効率的書き手）は、文章産出過程も効率的であり、文章がうまく書けない書き手（以下、非効率的書き手）は、文章を書く過程に何らかの問題点があるという考え方がある。

Zamel (1983) は効率的な書き手と非効率的な書き手の文章産出過程を観察し、両者の間にはプランニングと修正という行動に関して次のような差があると指摘している。第一に、非効率的書き手がしっかりとしたプランをたてるのに対して、効率的書き手が立てるプランは文章の方向性を定めるためのものであって、どのように表現するかはあまり考えていない。第二に、非効率的な書き手が文法、語彙などの問題に捕らわれ、読み返しも修正もその部分に限定されるのに対して、効率的な書き手は一文の読み返しから時には全文の読み返しを行なって内容を確認している。

これに対して Raimes (1985) は Zamel (1983) の結果とは異なる次のような非効率的書き手の文章産出過程の特徴を示している。第一に、非効率的な書き手の文章産出過程では、プランニングであると判断される行動は少ない。第二に、非効率的書き手は間違いにはあまり注意を払わず、そのため読み返しも修正も少ない。

このように、先行研究では、プランニング、読み返し、修正に関して一致した見解が得られていない。では、なぜ、このような結果の差が生じたのであろうか。その原因の一つとして、効率的な書き手と非効率的な書き手の文章産出過程の特徴を、プランニングや読み返しという行動の量で一般化しようとしたことがあるのではないだろうか。このような量的な分析は客観的な資料を収集し、仮説を検証することを目的とした方法論である。しかし、書き手によって文章産出過程は異なり、さらに個人の中でも、文脈や課題によって異なった文章産出過程が用いられる (Krapels, 1990)。したがって、現段階では、量的分析によって早急な一般化を求めるよりも、まず、ある書き手の文章産出過程で起こっている現象や行動を細かく記述し、その特徴を理解することが第一だと考えられる。

そこで、本研究では、効率的書き手と非効率的書き手、それぞれ1名の文章産出過程を事例としてとりあげ、以下の課題を検討することにする。

- 1) 効率的書き手と非効率的書き手はどのようにしてプランを生成しているか。そこで用いられる方略に差があるか。
- 2) 効率的書き手と非効率的書き手はどのようにして文章を書き上げているか。そこで用いられる方略に差があるか。

#### 用語の定義

本研究では文章産出過程を次のように考える。

- 1) 文章産出過程は一種の問題解決の過程であり、それは「構想の過程」、「文章化の過程」、「見直しの過程」という三つの下位過程から構成される。
- 2) 三つの下位過程にはそれぞれに達成すべき目標が存在する。構想の過程には「プランを考え出す」という目標がある。文章化の過程には「プランを言語表現化する」という目標がある。見直しの過程には「書いた表現を整え磨く」という目標がある。本研究では、これらの目標を文章産出過程における下位目標と呼ぶ。
- 3) 三つの下位過程は、それぞれの目標を達成するための行動（の組み合わせ）によって構成される。これらの行動には「プランを立てる」などの認知的な行動もあるし、「アウトラインを書く」などの外から観察できる物理的な行動もある。

4) 下位目標に到達するために、どのような行動を選択するかは書き手によって異なる。本稿では、この行動の選択の仕方を書き手の文章産出方略と呼ぶ。

## 研究方法

### 研究協力者

名古屋大学大学院文学研究科に在籍する大学院留学生6名に協力を得た。協力してもらった留学生は、レポートや論文を日本語で書く必要があり、日本語の文章産出に対するニーズも高い。したがって、文章産出過程で起こっている現象や行動を細かく記述し、その特徴を理解するための対象としては妥当であると考えられる。

### 資料収集方法

まず、協力者に6つの話題の中から課題とする話題を選んでもらった。これは、話題に関する知識がないために文章が書けないという事態をさけるためである。次に、課題文(資料参照)を提示し、それを読んでもらった。その内容が理解できたことを確認してから、原稿用紙に手書きで文章を書きはじめてもらった(注1)。

文章産出過程で、何を考え、何をしているかを推定するための資料は、発話思考法(注2)とビデオ録画によって収集した。文章は協力者が終了の合図を出すまで書いてもらった。

さらに、文章を書いた一週間後に、発話の不明瞭な部分や、協力者がとった行動の目的が不明な部分など内省報告が必要な場合はフォローアップインタビューを行った。

### 文章産出過程分析の方法

文章産出過程における行動を推定するために、得られた資料を、以下の手順で分析した。

- 1) 発話思考法によって得られた音声資料を文字化した。
- 2) あるまとまった行動を行なっていると推定される単位で文字化資料を分割し、それぞれに行動範疇名をつけた(注3)。行動範疇名をつける際には、Raimes (1985) と安西・内田 (1981) が分析に用いた範疇を参考にした。分析の結果、協力者が文章産出過程で行っている行動は、計画、明確化、検索、問いかけ、リハーサル、書きおろし、繰り返し、読み返し、翻訳、評価、修正、推敲、保留、要約、沈黙の15種類の行動範疇とその他に分類された。行動範疇の分類基準に関しては衣川 (1993) を参照されたい。
- 3) 最後に、それぞれの行動単位が、どの下位目標を達成するために行われ

表 1 : 採点結果一覧

協力者	協力者 A 得点 (SD)	協力者 B 得点 (SD)	t (23, 23)
総合評価 [18]	8.65 (1.82)	14.04 (3.01)	t=12.02**
a. 内容 [12]	6.61 (1.70)	9.39 (1.88)	t=7.22**
b. 構成 [12]	7.74 (1.76)	10.00 (1.83)	t=5.84**
c. 読みやすさ [12]	7.04 (1.33)	9.70 (1.79)	t=7.36**
d. 目的達成度 [12]	8.52 (1.75)	10.48 (1.59)	t=5.24**
e. 語彙 [12]	6.65 (1.27)	9.39 (1.78)	t=7.70**
f. 文法 [12]	6.65 (1.67)	9.13 (1.78)	t=6.78**
g. 文体 [12]	7.17 (1.72)	9.61 (1.85)	t=6.31**
h. 正書法・表記 [12]	7.61 (1.53)	9.87 (1.87)	t=6.02**

\* [ ] は配点を示す

\*\* P&lt;0.01

ているかを分析し、その結果をもとに協力者の文章産出過程を「構想の過程」、「文章化の過程」、「見直しの過程」(注4)に分割した。

#### 効率的書き手と非効率的書き手の決定

協力者が書いた文章を評価する採点者として、現職の日本語教師25名に採点を依頼し、23名から採点結果を回収した。表1に6人の協力者のうち文章の評価が最も高かった協力者と最も低かった協力者の採点結果を示す。全ての評価項目において、2人の採点結果の間には有意差が見られる。そこで、本研究ではAを非効率的書き手、Bを効率的書き手と考え、採点結果の差が生

表 2 : 協力者の背景情報

協力者	協力者 A	協力者 B
性別	女性	女性
母語	タイ語	中国語
在日期间	2年6カ月	1年9カ月
日本語学習歴	5年6カ月	5年9カ月
L1による作文能力の自己評価	あまり良くない	普通
日本語による作文能力の自己評価	良くない	良い
L1での文章産出状況	あまり書かない	あまり書かない
日本語での文章産出状況	あまり書かない	よく書く

表3：協力者が書いた文章に関する情報

協力者	協力者 A	協力者 B
日時	1993.5.14	1993.5.26
課題	単身赴任	外来語
所要時間	83分35秒	65分25秒
文数	18文	15文
字数	472字	704字
段落数	6段落	4段落

表4：第一文を書き始める前の発話プロトコル (A)

行動範疇	発話プロトコル
課題文の読み返し	経済的に負担が多い
問いかけ	給料は余分にもらわないのか。 なぜ、転職しなければならないですか
話題の計画	会社のために命令される人は、犠牲みたい。そのへんは、ちょっと不公平な感じがあるんですね

じた原因を文章産出過程の側面から分析することにする。表2に協力者2人の背景情報を、表3には文章の量的な指数を示す。

### 結果

ここでは、AとBの文章産出過程を主に次の三つの観点から分析し、その特徴を把握する。

- 1) 第一文を書き始めるまえにどのようにしてプランを生成しているか。
- 2) 第一段落を書きあげるとい目標をどのようにして達成しているか (注5)。
- 3) 文章を書いている途中でどのようにしてプランを生成しているか。

#### Aの文章産出過程

##### 第一文を書き始める前

Aは第一文を書き始める前に、20分の時間を使ってプランを生成している。この間の発話から一部を抜粋して表4 (注6) に示す。

まず、Aは課題文の「単身赴任は経済的に負担が多い」という部分をもう一度読み返し、その内容から感じた二つの疑問点を自分自身に問いかけている。そして、その問いかけをきっかけとして「単身赴任をする人は会社の犠

牲だ。不公平だ」という話題を計画している。その後、Aは課題文の読み返し→問いかけ→話題の計画、という行動の組み合わせを繰り返し、次の3つの話題を考え出している。

- ・ 単身赴任は家族関係に悪い影響を与える。
- ・ 単身赴任は子どもの教育にも悪い影響を与える。
- ・ 会社も単身赴任をさせるなら、何かやるべきだ。

以上の例は、次のようなAの構想の過程の特徴を示している。

- 1) 課題文の読み返し→問いかけ→話題の計画という行動の組み合わせが中心である。
- 2) Aは時間をかけて「どんな話題を書くか」は考えているが、「文章をどう構成するか」や「書き出しをどう書くか」はほとんど検討していない。

#### 第一段落を書く過程

Aが書いた第一段落は以下の文で構成されている。

現在「単身赴任」の問題についてはよく聞いたらしいである。私は

表5：第一段落を書く過程の発話プロトコル (A)

行動範疇	発話プロトコル
リハーサル	最近、現在
書き下ろし	現在、単身
方略の明確化	新聞に出しますから、漢字の問題も考えないといけ いんですね、漢字を、よく、使った、良い、漢字たく さん使った方が、いいんですね、
書き下ろし	単身赴任
.....	.....
書き下ろし	よく聞いた
リハーサル	らしいで、で、らしいである
問いかけ	必要な、らしい、らしいだけでいいですか
書き下ろし	聞いた、らしいである
.....	.....
書き下ろし	言わせて、いただ、いただく、いただきたい、
問いかけ	何体を書いたらいいんですか、今、普通体を書いて るんですけど、丁寧文で、書いた方がいいんじゃない ですか
書き下ろし	と、思います、と、思う、ね、思う、

外国人だが、この問題についてちょっと意見を言わせていただきたいと思う。

Aはこの段落を書くために10分の時間を使っている。この間の発話から一部を抜粋して表5に示す。

Aはまず「最近、現在」と表現をリハーサルしている(注7)。このリハーサルを行うことによって、Aはどちらの表現のほうが適切か、またその表現が文法的に正しいかなどを評価していると考えられる。

そして「現在」と書き下ろしたところで、もう一度課題文を読み返し「新聞投書だから漢字をたくさん使った方がいい」と表現上の基準を決定している。

さらにリハーサルを繰り返しながら「現在『単身赴任』の問題についてはよく聞いた」まで書いた時点で、どのような文末表現にするかを自問自答している。まず「らしいである」とリハーサルを行ったが、その表現に自信が持てず「らしいだけでいいかな」と自分自身に問いかけている。しかしこの問いかけに対する答えは見つけれず、結局「聞いたらしいである」とリハーサルしたままの表現を書き下ろしている。

再び「この問題についてちょっと意見を言わせていただきたい」まで書いた時点で、今度は文体についての自問自答を行っている。これは新聞投書がどのような文体で書かれているかについての知識がないために起こった問いかけである。この問いに対してははっきりした回答は出せず、そのまま「思う」という表現を書き下ろしている。

この例から、次のようなAの文章産出過程の特徴が示唆される。

- 1) リハーサル→(問いかけ)(注8)→書き下ろし、という行動の組み合わせが中心的である。
- 2) 文章を書き始める前に、「漢字をたくさん使うか」、「普通体で書くか丁寧体で書くか」などの表現上の基準が明確になっていない。
- 3) 自分自身の問いかけに対して、自信を持った答えが出せないまま、書き進めている。
- 4) 書き下ろすことが中心的な目標となっており、文章を整え磨くための見直しの過程はほとんど生起していない。

文章を書いている途中で生起する構想の過程

表6は、第二段落を書き始める前に観察された構想の過程である。

Aは第一段落を書き終えた時点で、再度課題文を読み返し、その内容から「外国人」という書き手の立場を明確にしている。そのうえで「日本社会と自



表6：文章化途中での構想過程の発話プロトコル (A)

行動範疇	発話プロトコル
話題の計画	ん、外国人の立場だから、日本の社会、日本の社会の問題を書けば、もし、自分の国の社会と比較したら、いいかもしれないね、
問いかけ	どうしよう、
読み返し	現在、単身赴任の問題については、よく、聞いたらしいである、
話題の計画	じゃ、私の知っている日本人は、単身赴任、あの、てん、転勤を出されて、だから、もう、家族がこういう問題が、ある、あの、書いたらいいかな、

分の国の社会を比較したらいいかもしれない」と話題を計画している。しかし、自分の国では単身赴任という事例がほとんどないため、「どうしよう」と自分自身に問いかけている。そして、その答えを探す過程で「比較する」というプランを捨て「一つの家族を例に取り、単身赴任すればどのような問題が起こるかを書く」というプランを生成している。

この例は、一つの段落を書き終えた時点で、次の段落で何を書くかを計画するというAの構想の過程の特徴を示すものである。

#### Bの文章産出過程

##### 第一文を書き始める前

Bは「始めてください」という指示が調査者から出された後、10秒沈黙してから第一文を書き始めている。この間プランを生成するための行動は観察されなかった。

##### 第一段落を書く過程

Bが書いた第一段落は以下の文で構成されている。

今、日本では外来語がよく使われていてその程度は氾濫だという人もいるし、外来語の使用を制限しなければならないという主張も出てきた。しかし、外来語でしか表現できない言葉はやはり外来語を使うほうがいいと私は思う。

Bはこの段落を書くために6分の時間を使っている。この間の発話から一

表7：第一段落を書く過程の発話プロトコル (B)

行動範疇	発話プロトコル
書き下ろし	…氾濫されていると言える
読み返し	今、日本では、外来語が、よく使われている、
修正	外来語が、よく使われていて [「いる」→「いて」]
読み返し	使われていて、その程度は、氾濫されている、氾濫
リハーサル	だと言える、
修正	だと [「されていると言える」削除]
読み返し	外来語が、よく使われて、その程度は、氾濫だ、
書き下ろし	という、人もいる
.....	.....
リハーサル	外来語、
繰り返し	しかし、
読み返し	今日本では外来語がよく使われていて(略)出てきた、
書き下ろし	外来語、

部を抜粋して表7に示す。

まずBは「今、日本では外来語がよく使われている。その程度は氾濫されていると言えるほど」まで一気に書き下ろし、すぐにその文を読み返している。そして「使われている」を「使われていて」に修正し、もう一度修正した部分を読み返している。さらに「氾濫されている」という部分では、「氾濫だといえる」という別の表現をリハーサルしてから、その表現に入れ替え、その部分も再度読み返している。

また、「しかし、外来語」という表現を考える時には、まず「外来語」という表現をリハーサルし、その前の部分を読み返してから「外来語」と書き下ろしている。ここで見られる繰り返しや読み返し(注9)は、リハーサルした表現が前後の文脈にあっているかどうかを確認するために行われているのだと考えられる。

以上の例は、次のようなBの文章産出過程の特徴を示すものである。

- 1) 最初に自分が表現したい内容を一気に書き下ろし、それを読み返ししながら徐々に良い表現に変えている。この特徴からBの文章産出過程では、文章化の過程と見直しの過程が交互に現れていることがわかる。この場合、Bは、書き下ろし→読み返し→(評価)→修正という行動の組み合わせを使用する。
- 2) 新しい表現を考える際には、リハーサル→読み返し、または繰り返し→書き下ろし、という行動の組み合わせを使用する。

表 8 : 文章化途中での構想過程の発話プロトコル (B)

行動範疇	発話プロトコル
問いかけ	それから、それから、それから
要約	動詞とか、自然とか、自然、自然、と、それから、 乱れ [メモ] それから、ニュアンス [メモ]
問いかけ	それから、
読み返し	さっき言ったように (略) うまく表現できると思 う、
書き下ろし	以上のように、ように、

3) リハーサルした表現や書き下ろした表現が前後の文脈に合っているかどうかを確認しながら文章産出を進めている。

文章を書いている途中で生起する構想の過程

表 8 は、第四段落を書き始める前に観察された「構想の過程」である。

B はまず「それから [何を書くか] (注 10)」と自分自身に問いかけ、その答えを見つけるために、第二段落と第三段落の内容を要約している。第二段落の内容は「言語変化は自然なことである」というものであり、第三段落は「外来語が日本語を乱すことはなく、かえって日本語で表せない概念などをうまく表現できる」という内容である。そして、自分が計画した話題を全て書いたということを確認してから、再度前の段落を読み返し、結論を書き始めている。

この例は、常に次に書く内容が前の文脈と合っているかを確認しながら書き進めるという B の構想の過程の特徴を示すものである。

## 議論

### プランについて

Raines (1985) は、非効率の書き手の文章産出過程の特徴として、プランを生成するための行動が非常に少ないということを指摘している。しかし、本研究の結果では、非効率の書き手のほうが文章を書きはじめる前に時間をかけてプランを生成している。

この結果の差をプランの質という観点から考えてみたい。Scardamalia & Bereiter (1987) は、効率的な書き手は「内容」と「修辞」という二つの目標を常に検討しつつ文章のプランを考えると述べている。つまり、効率的な書き手は「何を書くか」を考えた上で、「どのように書くか」も考え文章の目標を作る。ここでいう「内容」とは「どんな話題を書くか」を指し、「修辞」と

は「どのような文章構造を使って書くか」、「書き出しやしめくくりはどのような表現を使うか」などの文章構造や文章表現の側面を指す。これに対して、Aは時間をかけて内容は考えているが、「どのように書くか」という目標を設定していない。つまり、Aが非効率的書き手だと評価された原因の一つとして「修辭的目標」を設定しなかったことがあると考えられる。また、この可能性は、書き手の構想の過程の特徴を分析するときには、どのようなプランを立てたかを見なければならぬということを示唆するものであろう。

では、プランをほとんど立てていないBの場合はどうなのであろうか。プランは必要ないのであろうか。

安西・内田(1981)は小学2～6年生の文章産出過程を分析した結果、高学年の子どもは、起承結という文章構造や書き出しやしめくくりはどのような表現を使って書けばいいかという全体的なプランはすでに持っていることを指摘している。この指摘は、高学年になれば、すでに持っている全体的なプランにもとづいて文章産出を進め、文や段落の内容を考えるときに局所的なプランニングを行えばいいということの意味する。

安西・内田(1981)の指摘をBに当てはめてみればどうなるであろうか。Bは日本語で文章を書く機会が多い。この機会の豊富さからBは文章構造や書き出しやしめくくりはどのような書き方をすればいいかという全体的なプランを身につけたのではないだろうか。文章産出後の内省報告でも、Bは「説得するという目的の作文でしたね。そのような作文だから、外来語をどんどん使ってもかまわないというような理由とか、いいわけなどのものをたくさん書かなければならないと思っていました」と述べている。この報告は、Bが説得文を書く際に、どう進めていけばいいかという全体的なプランを持っていたことを示すものである。つまり、Bはプランを生成しなかったのではなく、すでにプランを持っていたのだと考えられる。

#### 文脈と文章の関係について

AとBはともに段落の切れ目切れ目で次に何を書くかを計画している。しかしそこで用いられる方略は異なる。Aは主に「次に何を書くか」だけを考えているが、Bは「今までに何を書いたか」を考慮した上で「さらに何を書くか」を考えているのである。

また、文章化の過程でも同じような方略の差が観察された。第一に、Aは次に書こうとしている表現をリハーサルし、その表現が形式的に適切であると判断できればすぐにそれを書き下ろしている。これに対してBはリハーサルを行った後で、読み返しや繰り返しを行い、リハーサルした表現が前後の文脈にあっていのかどうかを確認している。第二に、Aの文章産出過程では

文章を書き終わるまで見直しの過程がほとんど生起しなかったのに対して、Bは表現を書き下ろすたびに、それを読み返し、徐々に良い表現に変えている。これらの方略の差も文章の評価に影響を与える要因として働いたと考えられる。

#### 今後の課題

ここまでの考察から以下の可能性が示唆された。

- 1) 効率的な書き手はすでに全体的なプランを持っている可能性がある。
- 2) 効率的な書き手は言語表現を考える際にも、プランを生成する際にも、常に前後の文脈にあっているかどうかを確認している。
- 3) 非効率的な書き手はプランを生成するときに「何を書くか」しか考えておらず「どのように書くか」を検討していない。

Zamel (1983)、Raimes (1995) では、プランニング、読み返し、修正に関して一致した見解が得られていなかった。これは、書き手の文章産出過程の特徴を、プランニングや読み返しという行動の量で一般化しようとしたことにあるのだろう。本研究では書き手の文章産出過程で起こっている行動を質的に分析することによって上記の可能性を得ることができた。この結果から、効率的な書き手と非効率的な書き手の文章産出過程の差は、量的な分析だけで把握できるものではなく、行動の目的やプランの内容といった質的な分析を行うことによってはじめて理解できるものであるということが示唆される。したがって、今後、文章産出過程の特徴を把握していくためには、実際どのようなプランを立てたのか、何のために読み返ししているのか、さらに文章を書く前に知識としてどのようなプランを持っているかを把握しなければならないだろう。

さらに、本研究で明らかにできなかった以下の4点も検討する必要がある。

- 1) 非効率的な書き手はなぜ修辭的な目標を設定できないのか。
- 2) 非効率的な書き手はなぜプランや表現が前後の文脈に合っているかどうかを確認できないのか。
- 3) 日本語運用能力の差と日本語に関する知識の差がどのように文章産出過程に影響を与えるか。
- 4) 課題の差がどのように文章産出過程に影響を与えるか。

上記の課題を検討することによって、文章がうまく書けない書き手にどのような指導をすればいいのか、そして、どのような課題を与えて文章を書かせるべきかの枠組みが得られるであろう。今後も、本研究のような事例研究を積み重ね、上記の課題を検討を続けていきたい。

衣川隆生は、現在、名古屋大学大学院文学研究科で、主に文章産出過程と作文指導法を研究している。また、日本福祉大学において、学部留学生に対して主に論文作成の指導を行っている。

#### 注

1) 言葉や漢字がわからないために書けないという事態をさけるため、辞書の使用と調査者に対する最低限の質問は許可した。また、訂正箇所と訂正方法を把握するため、消しゴムは使用せず二重線で消すように指示した。

2) 発話思考法とは、問題解決の過程を明らかにする手法として一般的に用いられている手法であり、文章を書く過程で頭に浮かんだことや考えていることをどんどん口に出してもらいそれを記録する方法である。また、発話思考法を行う際には、協力者が自分の母語を使用することも許可した。

3) 本来なら行動範疇の分類も複数の判定者で行うべきであるが、今回は筆者一人で書き手の行動範疇の分類を行い、分類基準を設定することを第一の目標とした。但し、分類が主観的、恣意的になるのを最小限に押さえるため、言語形式から行動を推定することにした。

4) 「構想の過程」の抽出には「1) 行動群の一つ以上の『計画』という行動範疇が現れること、2) 『プラン』を生成しようとしている行動であると判断できること」という2つの基準を、「文章化の過程」の推定には「1) 行動群の一つ以上の『書き下ろし』という行動範疇が現れること、2) 『言語表現化』しようとしている行動であると判断できること」という2つの基準を、「見直しの過程」の推定には「1) 行動群の一つ以上の『修正』または『推敲』という行動範疇が現れること、または2) 行動群の一つ以上の『読み返し』または『評価』という行動範疇が現れること、そして3) 『文章を整え磨く』ための行動であると判断できること」という3つの基準を用いた。

5) 分析の結果、第一段落を書く過程とそれ以外の段落を書く過程で、文章産出過程の特徴に差は見られなかった。そこで、本稿では第一段落だけを分析の対象とすることにした。

6) 表内の発話例は、読みやすくするため埋め草的な要素や繰り返しは削除した。

7) 「リハーサル」は「1) まだ文字化していない表現を言語化し、2) その正確性や適切性を試してみること」と定義した。

8) ( ) は生起する場合と生起しない場合がある任意要素を示す。

9) 「繰り返し」は「書いたものを繰り返すこと」と定義した。「繰り返し」と「読み返し」の差は「文字を目で追いながら書いたものを音声化している」ものを「読み返し」、「文字を見ないで、書いたものを繰り返している」ものを「繰り返し」と考えた。

10) [ ] は筆者による注釈を示す。

#### 参考文献

- 安西祐一郎・内田伸子 (1981) 「子どもはいかに作文を書くか?」『教育心理学研究』第29巻第4号、323-332頁
- 衣川隆生 (1993) 「日本語学習者の文章産出方略の分析」『ことばの科学』第6号、51-

77 頁、名古屋大学言語文化部

- Krapels, A. R. (1990). The interaction of first and second language composing: Processes and rhetorics. Doctoral dissertation, University of South Carolina.
- Raimes, A. (1985). What unskilled writers do as they write: A classroom study of composing. *TESOL Quarterly*, 19, 229-258.
- Scardamalia, M., & Bereiter, C. (1987). Knowledge telling and knowledge transforming in written composition. In S. Rosenberg (Ed.), *Advances in applied psycholinguistics (Vol.2): Reading, writing, and language learning*. 142-175. Cambridge: Cambridge University Press.
- Zamel, V. (1983). The composing processes of advanced ESL students: Six case studies. *TESOL Quarterly*, 17, 165-187.

#### 資料 1 (課題文)

##### 課題文 (単身赴任-Aが選択した課題)

現在家族持ちで転勤をする人のうちの32.5%の人が単身赴任をしています。単身赴任者を年齢別で見ると、40歳代が54.5%と半数以上をしめています。

単身赴任は、経済的に負担が多だけでなく、家族関係が悪くなったり、子どもの成長にも悪い影響を与えるので、やめるべきだという人もいます。反対に、子供の教育のためには、学校をかわるよりも同じところで勉強したほうがいいので、家族全部で引越すより単身赴任のほうがいいという人もいます。

あなたは「単身赴任制度はやめるべきだ」と主張する人に賛成する外国人の立場から、単身赴任に賛成している人を説得するような新聞投書を書いてください。

##### 課題文 (外来語-Bが選択した課題)

日本では数多くの外来語が使われています。特に雑誌などではどんどん新しい外来語が使用されています。その書き方も外国語の発音にできるだけ近いものを使おうという考えの人と、できるだけ日本語にある発音を使おうという考えの人がいます。

日本人の中には「日本語に言葉があるのに、わざわざ外来語を使う必要はない」「外来語の使いすぎは日本語の乱れの原因だ」という人もいます。反対に「外来語には外来語でしか表せない特有のニュアンスがある」「時代に合わせて日本語が変わるのはしかたがない」と言う人もいます。

あなたは「外来語はどんどん使ってもかまわない」と主張する人に賛成する外国人の立場から、それに反対している人を説得するような新聞投書を書いてください。

#### 資料 2 (作成文章)

##### Aの作成文章

現在「単身赴任」の問題についてはよく聞いたらしいである。私は外国人だが、この問題についてちょっと意見を言わせていただきたいと思う。

家族だったら、皆そろっていた方がいいと思う。主人一人で転勤したら、いろいろな問題が起こるようになる。例えば、経済的に負担が多くなる。交通費、食事代、電話代

などももちろん多くなる。

経済負担の他に、夫婦の関係も影響を与える。うわぎしてしまった夫の件もあるそうである。まだうわぎしていないが、うわぎしたい夫もたくさんいるようである。夫婦の関係が悪くなったら、家族全体を与えるようにする。

その上、子供の成長にも悪い影響を与える。お父さんとお母さんがそろっていた子供の方が安心して精神的に成長するそうである。

以上のような問題があるから、私は「単身赴任制度」に反対する。会社は家族持ちの人に転勤の命令を出せば、その人と家族のために何かしてくれるべきだと思う。その人が会社の人だから何でも命令してもいいと考えは自己中心の考え方だと思う。人間だから、その人の気持ちに気をつけないといけぬ。人間はただ仕事ばかりじゃなくて家族のことも大切にすべきだ。

だから、日本の会社の社長の皆様、「単身赴任制度をやめてほしい」。

#### Bの作成文章

今、日本では外来語がたくさん使われていてその程度は氾濫だという人もいるし、外来語の使用を制限しなければならぬという主張も出てきた。しかし、外来語でしか表現できない言葉はやはり外来語を使ったほうがいいと私は思う。

時代が変わるにしたがって、言葉も変るといのはごく自然なことである。もし意思伝達に必要な適当なら、外来語をどんどん作ったり使ったりしてもかまわないと思う。新しい外来語ができたばかりのとき、それを聞いたり聴んだりする人には抵抗感があるかもしれないが、知らないうちに、その言葉がだんだん身につけていて、自分自身も使うようになるというようなことがよくある。また、できたばかりの外来語には抵抗感というより、新鮮みを持っている人が多い。だから、外来語の普及はそんなに難しくなく、時間が立つとともに、だんだん理解されたり、使用されたりすると思う。このような言葉に関する変化は自然なことなので、われわれ人間は何らかの手段によってその変化を止める必要はない。また、その変化を止めることもいけぬ。

「外来語の使い過ぎは日本語の乱れの原因だ」という人がいる。私はそう思わない。というのは、外来語は殆ど名詞として使われていて、日本語の主な枠組みとしての動詞、形容詞、助詞、などはやはり日本語そのものである。だから外来語は日本語の文法構造には何らかの影響は全くないので、日本語を乱すはずはない。先言ったように、外来語は名詞として使われているので、日本語で表せない概念とか事物の名称は外来語によってうまく表現できると思う。

以上のように、外来語によって自分の意思がもっと適当に伝達できることが多いし、外来語が日本語を乱す心配はいらないので、われわれ人間は、このような言語の自然的な変化に従ったほうがいいのではないか。